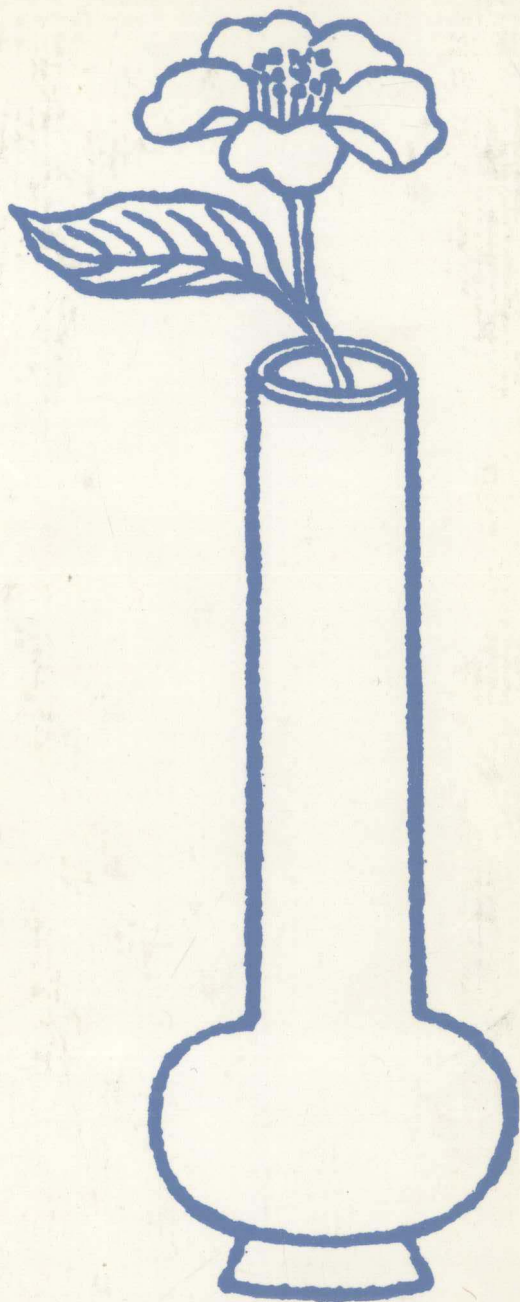


花をたてまつる

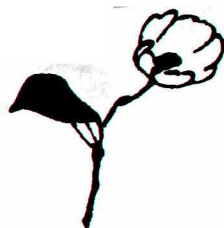
石牟礼道子



石牟礼道子



たてをたてまつる



花をたてまつる

一九九〇年三月十日 初版第一刷発行
一九九〇年六月一日 初版第二刷発行

著 者 石牟礼 道 子

発行者 久 本 三 多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂三丁目一番二号

電話 福岡〇九二(七六)二八九五

振替 福岡一三九四三〇番

印刷 凸版印刷株式会社

製本

装丁／田村 義也

©1990 Michiko Ishimure

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

0095-9004-0135

定価1560円 (1515円+税45円)

海と空のあいだに（歌集）	石牟礼道子	
潮の日録	石牟礼道子	四六・ハード 1500円（税抜）
常世の樹	石牟礼道子	四六・ハード 1300円（税抜）
天の病む	石牟礼道子編	四六・ソフト 1200円（税抜）
火を産んだ母たち	井手川泰子	四六・ソフト 1300円（税抜）
原野の子ら	吉田 優子	四六・ハード 1300円（税抜）
百姓記	小倉 愛子	四六・ハード 1530円（税込）
匪賊の笛	森崎 和江	四六・ハード 1600円（税抜）
絶筆	菊畑茂久馬	小スキラ・ハード 3100円（税込）
地方記者	三原 浩良	四六・ソフト 1300円（税抜）
夢野久作の場所	山本 巖	四六・ハード 1800円（税抜）
風と甕	松浦 豊敏	四六・ハード 2200円（税抜）
九州キリシタン新風土記	濱名 志松	A 5・ハード 6000円（税込）
なぜいま人類史か	渡辺 京二	A 5・ソフト 1800円（税抜）

花をたてまつる
目次

入魂	3
----	---

I

彼岸へ	7
「死」を想う	11
香華	15
死んだ妣たちが唄う歌	19
「切腹いたしやす」	23

II

花を奉るの辞	31
いまわの花	33
村のお寺	45

落葉の中で 74

猫との縁 78

蕾のまさにほころぶ刻 82

天の微光の中に 85

含羞に殉ず 88

III

女という原初 93

葦の渚 96

常世の舟 100

村の媼 105

民話としての学問 109

生きる 114

いのちの樹々 124

陽いさまをはらむ海 128

不知火海より手賀沼へ 173

IV

詩靈の業——未堂・徐廷柱詩集『新羅風流』について 213

生死の涯から——水上勉先生のまなざし 218

稲の光のなかを——趙谷弼と男寺党 224

恩寵をになった作品——島尾ミホ著『祭り裏』 229

らいてうさん・逸枝さん 232

拾いもの 235

北林谷栄さんのこと	238
清婉な声の花びら——新座の少女たちの合唱	242
靈感にみちた萩久保氏の歌曲	248
み民われ生けるしるしあり	251
ひかりの露に	255
いのちのつやとは	259
初出掲載誌	273

花をたてまつる

入魂

ここのとよりから出てゆく時と、帰ってくる時、不知火海は、まるで違う海に見える。時間のちがいもあるのだが、朝の若やかな波を揺らしている海にくらべ、

これが自分の知っていた海であらうかと息を呑むほど、莊嚴に変貌する海がそこにある。

舟一そう見えない光風の、たそがれてゆく時間の中にいると、この海は一日のうちに、太古からの営みをすべて復元し、夕方にはみずからそれを受容して、夜を迎えるのだと思えてくる。

油風という云い方がわたしの近くにある。

少し北上して、芦北郡沿岸にゆけば光風ともいう。舟に乗る人たちの言葉である。

言葉のちがいの微妙さを久しく考えていたが、夏の間、この沿岸の黄昏の中をゆき来してみても、光風の感じがややわかって来た。

風というのは海に風がなくて、波がおだやかなのをいうのであろうが、光風といえば、海の表

がまったく静止して、天の光をあまねく受け入れるために、

一枚の鏡と化すことをいうのだろう。

もちろんまったくの平面ではなく、こぼれてやまぬ光のために海は内側へとひろがり、無数の鏡の細片のような波のさざめきで成り立っているように見える。

黄昏の光は凝縮され、空と海は、昇化された光の呼吸で結ばれる。

そのような呼吸のあわいから、夕闇のかげりが漂いはじめると、

それを合図のように、海は入魂しはじめる。

わたしは、遠い旅から帰りつくことの出来ないもののように、

海が天を、受容しつつある世界のほとりに、茫然と佇っている。

そしてみるみる日が昏れる。いつもの、光を失った海がそこにある。

海と天が結びあうその奥底に、

わたしの居場所があるのだけれども、

いつそこに往って座れることだろうか。

彼岸へ

母が胃癌の手術を受けてから、丸四年経った。

わたしよりも躰が大きくて、若いときの写真をみると、じつになんともあどけない。八十六歳になったが、寝顔をみれば今なおその面影がのこっている。自分の親のことをこんなふうに書くのも、余命いくばくもない日々となったからである。

もちろん母には、癌であることは知らせなかった。手術を受けたとき、すでにリンパ球という箇所にも転移していて、いかんともなしがたい、と主治医の先生がおっしゃった。子どもらにとって、ほんとうに青天の霹靂だった。

時々、胃のあたりが痛いということがあったが、食は進む方だったから、アロエをかじれば、などと言って一緒にかじり、どういうわけだか、それで治ったりしていた。

あるとき発作がおさまらなくて、かかりつけの女医さんに診ていただいたら、これはいけない、心臓ですとおっしゃる。

甘いものの好きを少しやめさせれば治る、とみなして思いこんだ。本人もびっくりしたらしく、若い時はあんこ餅もちを一日に八、九箇も食べていたのを慎しんで、ご指示どおり、専門の病院に入院した。

書きものを抱えている長女のわたしより、妹夫婦の献身的な看護で、母は退院できた。ほっとしていたら、妹から仕事先に電話が入った。息をつまらせた声だった。

治り方をみるため、精密検査をして下さった女医さんが、九十パーセント、癌がんと思える影が、胃の入り口に写っているから、知らせよとおっしゃっている、というのだった。驚愕きょうがくし、度を失って、その先生に電話した。橋本憲三先生の主治医でもあった方で、文学上の友人でもある。

「心臓の方はですね、治っているんですよ」

治っている、とおっしゃる口調には驚きがこもっていた。そのおっしゃり方からすれば、心臓もだいぶ悪かったにちがいない。それは治せたのに、癌が居座っていたのである。

手術をしなければ、あと半年の命、といわれた。

手術をしにゆく朝、母は、便所の掃除をし、庭の畑に立って、にが瓜うりと、紫豆の蔓垣つるがきをばりばり引き剥はいだ。植木に豆の蔓が這はい、それが枯れかけていたのが気がかりだったとみえる。

「こりや、見苦しかねえ」

と呟つぶやきながら立って見まわしていたが、なにをまなこに入れ、なにを思っていたことだろう。とても半年しかない命とはみえなかった。例年にない酷暑だったので、そのせいで、肩のあ